

外国語の歌詞による歌曲の日本語訳演奏についての一考察と実践例

クルターグ・ジェルジュ作曲『言葉とはなに』を扱って

降矢美彌子（宮城教育大学）・竜田晴美（千葉県立四街道高等学校）

目黒稚子（会津若松市立荒館小学校）・山崎純子（二本松市立油井小学校）

岩田愛子（実践女子学園中学校高等学校）

ハンガリーの作曲家クルターグ・ジェルジュ（Kurtág György : 1926- 在フランス）は、今日最も注目される作曲家の一人である。クルターグは、極限まで音をそぎ落とし、音楽の要素である、音と沈黙の質を執拗なまでに追究する。クルターグの作品は、俳句に例えられることもある。クルターグが最初に日本に紹介されたのは、全8巻からなるピアノのための小品集『遊び（Játékok）』であった。『遊び』の前書きは以下のように始まる。「演奏する喜びは、動く喜びだ。不器用に鍵盤を手探りで探し出したり、リズムを数えたりするかわりに、最初のレッスンから全鍵盤の上を大胆に素早く動き回れたら。まだはっきりとはしないこのような考えが、この小品集の創造の発端となった。後略」

『遊び』の第1巻第1番は、前書きの通りピアノに触れる最初の瞬間から全鍵盤の上を大胆に素早く動き回る。『遊び』第1巻は、ピアノの初心者と同時に、プロの演奏家がステージで弾くレパートリーになっていることにもこの作曲家の特徴が象徴されている。

『言葉とはなに』（Op.30/a）は、クルターグの代表作の1つで、1990年に作曲された。作品は、晩年失語症に苦しんだアイルランド出身のフランスの劇作家、小説家、詩人のサミュエル・ベケット（Samuel Beckett : 1906-1989）の最後の文章「言葉とはなに（Mi is a szó）」と、交通事故によって失語症に苦しんだ歌い手モニョーク・イルディコー（Monyók Ildikó : 1948-2012）にインスピレーショ

ンを得て作曲された。原作はフランス語と英語で書かれているが、クルターグはハンガリー語に翻訳されたテキストを用いている。

歌い手は語り、どもり、狂おしい悲鳴のように言葉を発する。ベケットは、「言葉とはなに。むなしいもの。なに、なに、なに…」と同じ歌詞を執拗に繰り返し、人間にとっての言葉の意味を問う。指揮をしながら弾かれるピアノは、ソロとほとんど同じ音を1本の指で支えるという特異な手法で作曲されている。

本発表では、始めに『遊び』を事例にして、クルターグの作曲の特徴を明らかにする。次に、外国語の歌詞から日本語歌詞を創る場合、両言語の母音・子音、音節、語順、演奏法などの多くの違いをどのように解決し得るのかについて、『言葉とはなに』のハンガリー語歌詞、日本語歌詞による演奏を実演し、外国語の日本語歌詞訳による演奏上の課題とその解決法の試案を提示したい。演奏協力は、会員を含む福島コダイ合唱団。演奏にあたってクルターグ氏から多くの指導・助言を得、ハンガリーと日本で、両言語で演奏を行い、言葉では言い表すことの出来ない東日本大震災による福島原発事故による苦しみを表現し、高い評価を得た。